

中学生のパーソナリティ傾向と親の養育態度の 関連：教育現場における問題解決を目指して[†]

宮代こずゑ*・添谷 幸栄**
宇都宮大学教育学部*
真岡市立久下田中学校**

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第4号 別刷

2018年2月28日

中学生のパーソナリティ傾向と親の養育態度の 関連：教育現場における問題解決を目指して[†]

宮代こずゑ*・添谷 幸栄**

宇都宮大学教育学部*

真岡市立久下田中学校**

中学生200名を対象として質問紙調査を行った。調査では、子どもの境界性パーソナリティ傾向、および、子どもから見た父親／母親の養育態度についての質問項目へそれぞれ回答を求めた。境界性パーソナリティ傾向尺度を5つの因子に分けて検討を行ったところ、母親の養育態度は子どもの対人関係制御不全と自己安定性に有意な影響を及ぼしていた。一方、父親の養育態度が子どもの境界性パーソナリティ傾向に及ぼす影響については、5因子すべてにおいて有意であった。

キーワード：養育態度 問題行動 家庭環境

1. 問題と目的

1-1. 学校-家庭の連携の難しさ

学校・地域・家庭の連携の重要性が強調されて久しいが、実際はあまり連携が進んでいないのが現状であろう。例えば学校現場においては、教員が保護者との連絡がなかなかとれず困るケースが存在している。学校生活で子どもに問題行動が見られる場合、子どもに直接指導する他、保護者への連絡を行い、その後の対応について学校と家庭との連携が必要となる。そのため、早急に保護者に連絡を取ろうと試みるが、何度電話をかけてもつながらず、学校からの着信があってもそのまま放置する、家庭訪問をしても留守である、家に滞在していても返答しない等の問題が存在する。また、そのような保護者の中には、保護者会や授業参観などについても学校へ足を運ぶことがほとんど無く、話し合いの場が持てないということがよく見られる。また、そのような保

護者の中には、学校との繋がりを避けるだけでなく、他の保護者との繋がりをさえも持たずにいるケースも見られる。そのような場合、学校は子どもの家庭での様子や子どもに対する保護者の養育態度を学校側が把握することができない。

1-2. 保護者の養育態度が子どもに及ぼす影響

篠原・吉本(1995)^[7]は、三隅(1966, 1978)^{[4] [5]}のP-Mリーダーシップ理論に基づいて4つのP-M式養育類型に分類し、両親の養育態度が子どもの基本的な生活習慣に及ぼす効果性について述べた。伊藤(2000)^[3]もまた同様に親の養育態度に注目し、問題行動と規範意識についての発達的特徴を明らかにした。そしてその背景にあると考えられる親の養育態度を関係性と規制の2軸により、4つのタイプ(両高・密着・管理・低関与タイプ)に分類し、子どもに対する親の養育態度の影響について比較・検討を行った。その結果は次の通りである。最も健全な子どもを持つ親は両高タイプに最も多く、親自身にも迷いがなく自信にあふれている。密着タイプの親は両高タイプと同様、親としての自信をもっている。その一方で、子どもの逸脱行動はやや多いが自己イメージは良好で子どもとの関係も好ましい。管理タイプの親は子どもの逸脱行為は少なく規範意識も高いが、子どもの自己イメージと親子関係がやや否定的である。さらに親自身が親としての自信がもてな

[†] Kozue MIYASHIRO* & Yukie SOEYA**: The relevancy between the personality trait of junior high school students and their parents' child-rearing style: Aiming for the solution of the problems around the classroom

Keywords: child-rearing style, problematic behavior, students' home environment

* School of Education, Utsunomiya University

** Moka Municipal Kugeta Junior High School

(著者1連絡先: miyashiro@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

い者が多い。そして親自身に迷いが強く自信が持てない状態にあるのが低関与タイプの親であり、子どもは問題傾向が多く規範意識も薄い。

このように、親の養育態度が子どもに及ぼす影響は非常に大きいことが明らかとなっている。

1-3. 養育態度把握の重要性

石隈・田村(2003)^[2]は、子どもを取り巻く大人が丸一となって、問題を抱えた子供を援助する重要性について主張し、そうしたタイプの援助(チーム援助)が必要な理由について、大きく3つにわけて論じている。1つ目は、援助者ひとりが持つ情報だけでは、子どもを援助するのに不十分であることである。2つ目は、援助者一人が行える援助には限りがあることである。また3つ目は、援助者がそれぞれ勝手な方針で子どもを援助すると子どもを混乱させてしまう可能性があることである。特にこの3つ目の理由により、(学校・家庭の「連携」が難しい場合であっても、少なくとも)保護者の養育態度については、ある程度学校側も把握しておく必要がある。しかし吉田(2007)^[9]は、複雑な問題を抱えている子どもや保護者ほど、教師やPTA(Parent-Teacher Association)に所属する他者とつながるのが難しく、つぎつぎと支えを失い孤立していくケースがかなりあるとしている。

以上のことから、本研究ではまず、家庭環境に問題を抱えた生徒の支援につなげるために、問題行動の原因となりうる諸問題のうちの一つとして、親の養育態度に焦点を当てる。そして、学校が生徒の親の養育態度をいかに把握するかの試みとして、質問紙法を用い、子どもの目から見た親の養育態度についての測定を行う。

それから、その親の養育態度が子どもにいかに関与しているかについても検討を行う。学校現場は様々な生徒がいるが、中にはすぐに感情的になってしまったり、教師や周囲に対する不信感をぬぐえずにいたり、親への過度の依存などの極端ケースに至ったりするなど、パーソナリティ障害(personality disorder)に類似した言動が見られることがある。パーソナリティ障害とは、DSM-IV(精神疾患の診断・統計マニュアル)の第四版(American Psychiatric Association, 2000)^[1]では、「著しく偏った内的体験や行動の持続的様式」とされる。つまり偏った考え方や行動パターンのため、家庭生活や社会生

活、職業生活に支障をきたした状態である。パーソナリティ障害の基本症状には、(1)両極端で二分法的な認知、(2)自分の視点にとらわれ、自分と周囲の境目があいまい、(3)心から人を信じたり、人に安心感を持つたりすることができない、(4)高すぎるプライドと劣等感が同居、(5)怒りや破壊的な感情にとらわれて、暴発や行動化を起しやすいついという共通した特徴がある。

本研究では、「障害と呼ぶには至らないが、上記の特徴が当てはまり、日々生きづらさを抱えている生徒」が持っている認知・行動パターンについて、パーソナリティ傾向と呼ぶことにする。こうした傾向を測定する尺度を用いることで、親の養育態度との関連について検討する。

2. 方法

調査時期：2017年7月上旬に栃木県内の公立中学校で行った。

調査参加者：1~3年生200名で、内訳は、1年男子40名、女子31名、その他1名、2年男子37名、女子41名、3年男子27名、女子23名であった。

調査内容：以下の4つについて回答を求めた。実際に使用した質問紙は、付録として示す。

- 1) フェイスシート：学年、年齢、性別、家族構成(生活を共にしている家族とその人数)。
- 2) 基本的な生活習慣：篠原・吉本(1995)^[7]が作成した基本的な生活習慣尺度(40項目、3段階尺度)を使用。
- 3) 両親の養育行動：篠原・福山(1987)^[8]が作成したP-M評定尺度(32項目、5段階尺度)を使用。
- 4) 境界性パーソナリティ傾向：斎藤(2007)^[6]が作成した境界性パーソナリティ傾向尺度(38項目、5段階尺度)を使用。

調査手続き：調査は、学級毎に集団形式(参加者ベース)で実施した。調査の際は、生徒に対し、質問紙の質問項目を読み回答すること、質問の内容に疑問があったり理解できなかったりした時には担任教師が個別に説明することを教示した。

3. 結果と考察

パーソナリティ傾向尺度は5つの因子(情緒制御不全、保護欲求不全、対人関係制御不全、保護者との関係不全、自己安定性)に分かれたため、因子別

の境界性パーソナリティ傾向得点の検討を行った。

まず、親の養育態度得点が上位25%以上の生徒と下位25%以下の生徒を母親と父親とそれぞれについて抽出し、それらの因子別境界性パーソナリティ傾向得点を算出した。

次に境界性パーソナリティ傾向得点を従属変数、母親の養育態度（高／低）を独立変数とした対応の無いt検定を行った結果、母親の養育態度が子どもの「対人関係制御不全」に及ぼす影響は、統計的に有意であり ($t(98)=21.562, p<.001$)、母親の養育態度得点が低いほうが、子どもの対人関係制御不全が高くなることが示された (図3)。また同様に、母親の養育態度が子どもの「自己安定性」に及ぼす影響が有意であり ($t(98)=31.690, p<.001$)、母親の養

育態度得点が低いほうが、子どもの自己安定性が低くなることが示された (図5)。

一方、養育態度が子どもの情緒制御不全、保護欲求不全および保護者との関係不全に及ぼす影響は認められなかった (図1,2,4)。

これらの結果から、母親の養育態度が低いと、子どもは対人関係制御に困難を抱えることが示唆された。また同様に、母親の養育態度が低いと、子どもの自己安定性も低くなってしまふことが示された。

次に、父親の養育態度と5因子別の得点平均値の関連について、図6 から 図10に示す。

このデータについても境界性パーソナリティ傾向得点を従属変数、母親の養育態度（高／低）を独立変数とした対応の無いt検定を行った結果、すべて

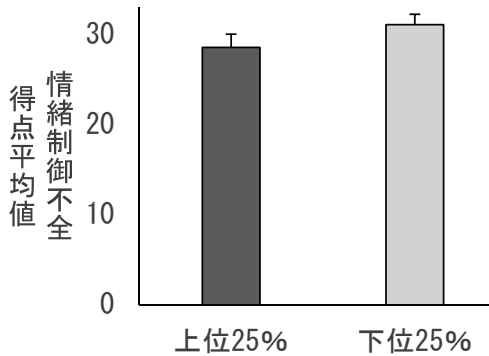


図1 母親の養育態度得点と子どもの情緒制御不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

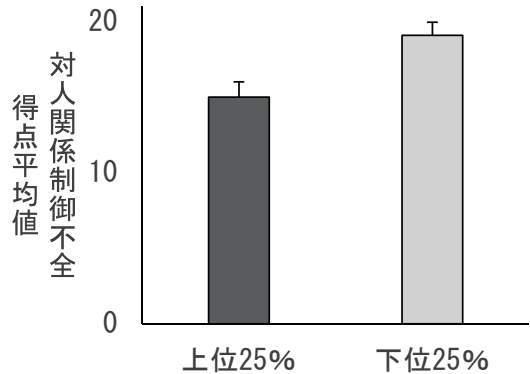


図3 母親の養育態度得点と子どもの対人関係制御不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

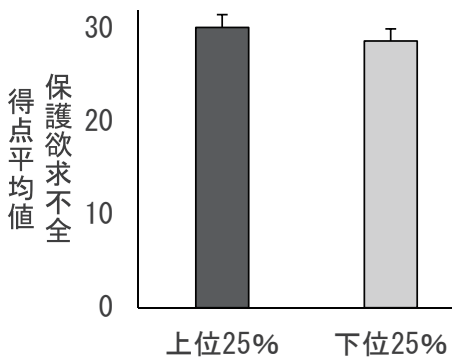


図2 母親の養育態度得点と子どもの保護欲求不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

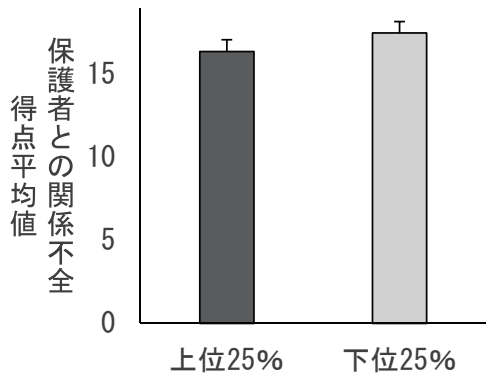


図4 母親の養育態度得点と子どもの保護者との関係不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

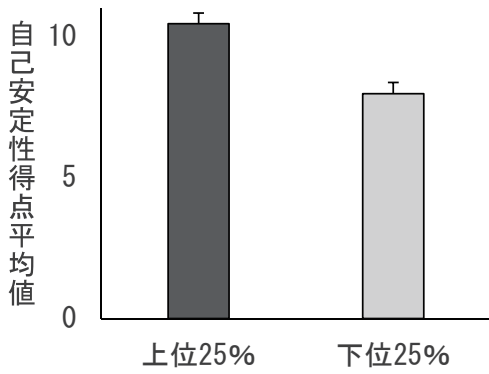


図5 母親の養育態度得点と子どもの自己安定性尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

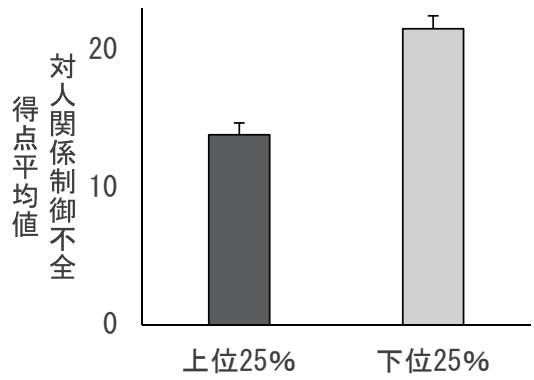


図8 父親の養育態度得点と子どもの対人関係制御不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

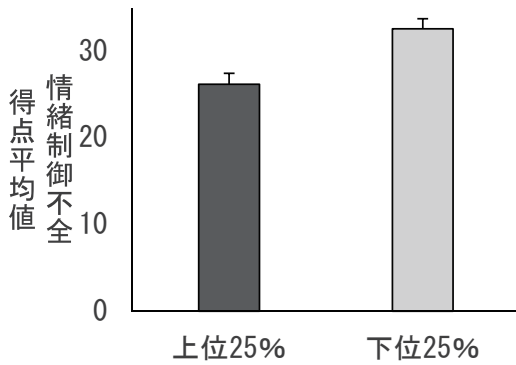


図6 父親の養育態度得点と子どもの情緒制御不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

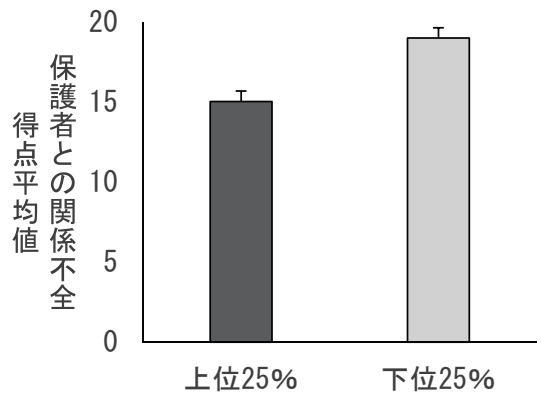


図9 父親の養育態度得点と子どもの保護者との関係不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

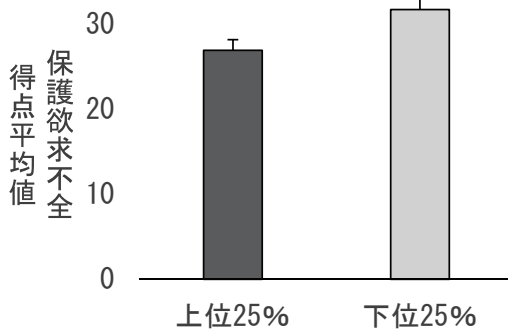


図7 父親の養育態度得点と子どもの保護欲求不全尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

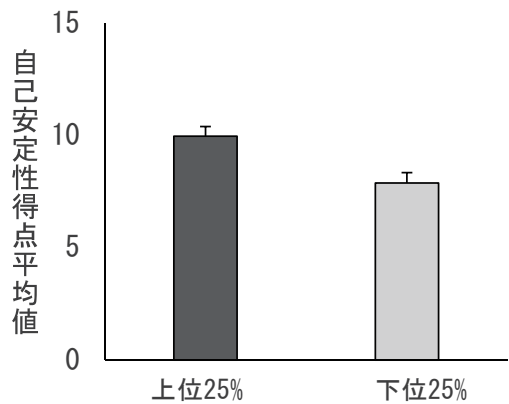


図10 父親の養育態度得点と子どもの自己安定性尺度得点の関連
※エラーバーは標準誤差を示す

の因子において、父親の養育態度が子どもの境界性パーソナリティ傾向に及ぼす影響が有意であった ($p < .001$)。父親の養育態度得点が低いほうが、子どもは情緒制御、保護欲求、対人関係制御、保護者との関係に困難を抱えるようになり、自己安定性も低くなってしまふということが示された。

母親の養育態度については、2因子においてのみ、子どもの境界性パーソナリティ傾向に及ぼす影響が見られたのに対し、父親では5因子すべてに有意な影響が見られた。一見、母親よりもむしろ父親の養育態度のほうが、子どもの境界性パーソナリティ傾向に大きな影響を及ぼしているように思える結果である。しかし母親・父親の養育態度平均得点そのものを比較してみると、母親のほうが全体的に高い(母親養育態度平均得点: 112.1 ± 1.537 , 父親養育態度平均得点: 103.09 ± 2.640) ことがわかった。

すなわち、まず母親の養育態度は父親と比べて、どの家庭においてもある程度高い。それに加えて父親の養育態度も高い家庭においては、子どものパーソナリティ傾向を抑えるのに役立つと考えられる。

ここ数年は、日本でも男女平等の重要性が叫ばれており、育児に積極的に関わる父親を「イクメン」と呼ぶなど、家庭において家事や育児の役割が父親と母親の間で「共同」の仕事とみなされる傾向が生まれつつある。しかし今回のデータからは家庭における子育ては依然として母親が主軸となつて行われていることが考えられる。父親の養育態度についての質問項目に対しては「どちらでもない」と回答する生徒が、母親についての回答と比較して多かったことから、養育現場における父親の存在感の無さが浮き彫りとなった。

4. 総合考察

本研究から、子どもの境界性パーソナリティ傾向については、母親の養育態度に比べ、父親の養育態度の方が子どものあらゆる側面において大きく影響を及ぼすということが明らかになった。その背景として、それぞれの家庭における子どもの養育場面における父親の影の薄さがあり、だからこそ、父親の養育態度が高い家庭では、そうでない家庭と比べて、養育のありかたが大きく変わるのであろうと考えられる。

また、子どもが何らかの要因によりパーソナリ

ティ傾向を身に着け、それが親の養育態度に影響を及ぼしているという解釈も可能である。親が子どもに対してかかわりを持つとするとする一方で、子どもがそれを受け入れることができずにいる場合、そのような子どもの様子が親自身が悩み、自信をもつことができず、その結果、親自身が子どもとの関わりを回避するようになり、養育態度の低さとして表れることが考えられる。特に、本研究でも見られたように父親の養育態度が低い場合や、父親がいない場合、母親は子どものパーソナリティ傾向について誰かに相談することもできず、育児に不安を抱えたまま次第に周囲との孤立が進んでしまう可能性がある。もしこのようなことが実際に起きているのであれば、たとえば「父親の養育態度が低くても、祖父母と同居していれば、子どものパーソナリティ傾向が低く抑えられる」というような結果が見られると思われる。子育てを手伝ってくれる、あるいは話だけでも聞いてくれる存在が身近にいることが、どれだけ母親の助けになるか。この点については今後、家族構成等のデータを用いて分析を進める予定である。

また、県や市町村における取り組みとして、スクールカウンセラーやスクールサポーター、家庭相談員など、多くの外部相談機関が設置されている。母親自身の支援や子どもの問題についての相談および対応をする機関として、今後ますますその存在の必要性が考えられる。

5. 引用文献

- [1] American Psychiatric Association, *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, Fourth Edition, Text Revision*, American Psychiatric Association (2000) .
- [2] 石隈 利紀・田村 節子, 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門: 学校心理学・実践編, 図書文化社 (2003).
- [3] 伊藤 美奈子, 子どもの問題行動の発達の特徴とその背景にある諸要因一親の養育態度に注目して一, 総務庁青少年対策本部低年生少年の価値観等に関する調査, 第3章 (2000) .
- [4] 三隅 二不二, 新しいリーダーシップ 集団指導の行動科学, ダイヤモンド社 (1966) .
- [5] 三隅 二不二, リーダーシップの行動科学, 有斐閣, 第2章, pp.416-419 (1978) .

- [6] 斎藤 富由起, 境界性パーソナリティ特性尺度開発の試み, 千里金蘭大学紀要, 4, pp.65-72. (2007) .
- [7] 篠原 弘章・吉本 逸子, 両親の養育態度と子どもの基本的な生活習慣, 熊本大学教育学部紀要, 44, pp.239-257 (1995) .
- [8] 篠原 弘章・福山 久子, 両親の養育態度が児童の達成動機と学校不安に及ぼす影響, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 36, pp.257-276. (1987) .
- [9] 吉田 圭吾. 教師のための教育相談の技術, 金子書房 (2007)

平成29年10月31日 受理

**The relevancy between the personality trait of junior high
school students and their parents' child-rearing style:
Aiming for the solution of the problems
around the classroom**

Kozue MIYASHIRO* & Yukie SOEYA**

* School of Education, Utsunomiya University

** Moka Municipal Kugeta Junior High School